

要旨

アメリカ社会では人種・エスニックといった区分は公的な文書や政策にも採用されている。白人、黒人、ラティーノ、アジア系、ネイティブ・アメリカンという人々を分節化する主な分類枠組みは、アメリカ社会において、そして政治的なレベルにおいても頻繁に使用され、そのような分類に基づいて政策——たとえばアファーマティブ・アクションなど——が考案／実施されている。人種・エスニックという分類枠組みで区分された集団同士の関係について、考察するうえでの先行モデルとして、「エスニック間継承モデル」や「エスニック間競争モデル」がある。これらのモデルは、アメリカにおけるエスニック・スタディーズにおいて、主に白人と黒人という二つのグループ間での関係について観察する際に多様に用いられたモデルである。このような従来の移民に関する分析アプローチでは、移民達の同化の方向性やその過程に研究の重心が置かれ、アジア系の人々はホスト文化である白人中流文化への同化をほぼ達成したかのように論じられてきた。そしてアジアからの移民及びその子孫については、アメリカ社会における「成功した」エスニック・マイノリティとして、皆が目指すべきマイノリティとして、そのイメージが広く普及している。

しかしながら、そうした見方は楽観的でアジア系の人々が現代において経験している差別に満ちた現実を見落としていることを90年代以降のエスニック・スタディーズは告発してきた。つまり、アジア系の人々に対する好意的表象は白人の視点から形成された「ホワイト・フレーム (White frame)」実践の産物であるにすぎないことを指摘したのである。そうした試みの一つの成果として、モデル・マイノリティ論があげられる。モデル・マイノリティ論は、「優秀なアジア系」という表象と、「福祉政策の不当受給者」としての黒人やラテン系の人々といった対で語られることの多い二つの表象により、二つの集団間における闘争という図式が強化された点を指摘するものである。本来ならば、白人によって同じように虐げられているとして協力を模索すべき集団の間での断絶が深まり、さらには、より白人に近い社会的地位をめぐる「パイの奪い合い」ともいうべき新たなマイノリティ間闘争が開始されたというのがこのモデル・マイノリティ論の告発するところである。

本発表の目的は、集合的アイデンティティと社会運動の観点から、このモデル・マイノリティ論の再評価を試みる。具体的には、集合的アイデンティティの構築プロセスを解明するうえで、カルチュラル・スタディーズ (特に言説分析) が、このモデル・マイノリティ理論から摂取すべき知見について論じることが一つ。そして、エスニシティが分節・接合 (articulate) され、実践を通してどのように構築されるのか、そこにどのような力関係が潜んでいるのか、このような「文化的権力がせめぎあう表象をめぐる闘争の場」としてマス・メディア表象を分析する視座の重要性あらためて強調することが二つ目の目的となる。